大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ホーフマンスタールの悲劇『塔』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 船越, 克己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006588

ホーフマンスタールの悲劇『塔』について

船越克己

はじめに

ホーフマンスタールは一八七四年二月一日、ウィーンのザレジィアーナーガッセで裕富な銀行家の一人息子として生まれ、一九二九年七月十五日、ピストル自殺した愛息フランツの埋葬に出かけようとしていた矢先、卒中に見舞われ、ウィーン郊外のロダウンにある自分の書斎の長いすの上で息をひきとった。一九二〇年代に書かれた悲劇『塔』には第三稿まである。初稿は二回にわたって≪Neue deutsche Beiträge≫（一九二三、一九二五年）に載せられ、最終稿は一九二七年に発表されている。この小論では全集（S. Fischer Verlag）に収められている第一稿と第三稿がとり扱われる。

ホーフマンスタールが書いたこの悲劇『塔』の題材はきわめて古くからみられる。それは西洋文学において、いろいろな形でくり返されてきたところの、塔にすてられ、動物のように幽閉されている王子の題材（ファーベル）なのだ。それというのも、王様には王子がいつの日か彼の王座を奪うであろうと予言されているからである。すでにカルデロンのコメーディア『人生は夢』（一六三一～三二年頃）はこの題材に基づいている。

この小論の目的は、

【1】悲劇『塔』はどのように解釈されているか。

【2】『塔』における問題。

【3】「塔」から出ようとするホーフマンスタールの姿勢について調べることである。

【1】

オット・ホイシェレ（Otto Heuschele）は『ホーフマンスタール論（詩人の肖像）』[1]で『塔』についてつぎのように書いている。

「われわれは、われわれの現代文学において、ホーフマンスタールの『塔』のように、それ自体人間的なものならびに人間存在の秩序のための格闘が極限まで、形而上学の領域まで入って述べられた文学作品を少ししかもっていない。」（九〇頁）ホイシェレは『塔』を形而上学に属する作品だと断言している。続けて言う。このドラマの本質は「登場人物が世界を所有し、世界を自分のまわりに形成し、その世界のさまざまな力の擬人として対立しあっていることである。…（彼らは単なる象徴ではなく）現実にみたされた、現世と来世にみたされた人間であり、目にみえる諸力と目にみえない諸力の所持者なのである」（九一頁、傍点・船越）。なるほど形而上学だ。ホーフマンスタールはドラマの場所を「ポーランドの王国、しかし歴史的というより伝説的な王国」とし、時を「十七世紀に似た雰囲気」をもつ過去のある時代と仮定しているが、ホイシェレはこれに注釈を加えた。「事件を無時間的な領域へ移調することがこの作品に超時間的な、霊的・精神

的な作用力と超時間的な永続性をも与えているのである」。（九二頁）

ホイシェレは別の『塔』小論（一九四六～四七年）[2]で述べている。『塔』は「時間的なものの糸と無時間的なものの糸が解きがたく互に結び合ってできている一枚の巨大な織物である」。（七八頁）　時間的なものと無時間的なものの結合？　ホーフマンスタールは『塔』において政治的・歴史的な事件に対して彼の態度を主張したのではなくて、「いつの時代にも衝突し、　とくに大きな転換期には衝突せざるを得ない人間的諸力と悪魔的諸力を呼び出したのだった」。（八七頁）「いつの時代にも」という文句があの形而上学的結合の仲人であったのか。

エトガー・ヘーデラー（Edgar Hederer）[3]は『塔』をどのように研究しているか？　主観の「おおいをとり除き、真実なものの領域へ進むこと、歴史的な場所において超歴史的な（ものへの）可能性へと進むこと、これが主人公ジーギスムントに課せられた使命である」。（三三六頁）　ヘーデラーは書いている、『塔』においては「理想と現実の深淵は閉じている。象徴的な劇の背後に黙示録的な現実主義が語られ、もっともきびしい現実から一段と高い生命の様相が生じているのだ」。（三四三頁）　さらに引用を続けよう。「理解しがたい全体が彼（ジーギスムント）に向かって押しよせてきて、一つの心像となった。そこでは星辰や事実の現実界、人物と宇宙の進行のドラマがもつ主要な意義が啓示されているのである。…歴史の進行の幻影の背後には、神の御心によって、世界全体を包括する、地上の事物の変容が成就されるという期待がひそんでいるのだ」。（三四二頁）　こうした冥想がジーギスムント像に集約されているという。要するに神の御心による世界の神秘的変革の仮定自体が「理想と現実の深淵」の解決であるとしているのだ。

クルチウス（Curtius）[4]は宇宙における人間の位置をつぎのように説明した。「通常の思考においてはあらゆる作用は一ないしそれ以上の特定の原因へと還元される。…従って人間は動因によって動かされていることになる。…それに反して魔法的な世界においては万事が万事と互に関連しているのである。すなわちそれぞれの部分的なできごとが世界全体との相互関係の中にある。最も遠くにある太陽や星もこうした世界に属している。…人間はもはや存在物の中心点ではなくなるのだ。人間は無限に上下を指し示している段ばしごのどこかの一段に位置している」。（一三三頁）　クルチウスはこのような魔法的な世界をホーフマンスタールの世界観の基礎とみなしている。クルチウスは魔法的な世界は「風俗学の物置にある骨董品」ではなくして、「精神性という高度な、そして最高の段階においてくり返し実現されうる一つの可能性である」（一三三頁）と弁明している、いや弁明せざるをえなかった。ヘーデラーの『塔』に対する見解とクルチウスのホーフマンスタール観は互にたいして遊離したものではない。

ついでに『塔』がシュレーダー（R. A. Schröder）[5]にどんな印象を与えたかを紹介しよう。彼は一九二六年に書いている。「それ全体は一つの正夢のように思われる。そこではもはやほとんど伝えうることができないほどの様相と威力とをもつ世界像の諸要素が結合されて、一つの輪となっているのである。神秘的暗黒から劇の人物が現われ、…彼らが対話する言語は、異常なパトスと時にはもはや耐えられぬ領域にまで達する緊張とにみちているとはいえ、その最も高められた瞬間には単語の奪い合いのような作用をするのだ。なぜならここではもともと何も言われてはいないのだ。話されたすべてのことがらは一段と高い、言うにいわれぬ現実を来世から投げかける陰影の中に漂っているのである」。（八五四頁）　つまり『塔』の言葉はパトスと緊張とにみちてはいるものの、結局何も言ってはいないということになるが、このことはシュレーダーの説明によれば、「詩人の意欲の緊張」であ

り「巨大な絵画の巨大な枠」であり、「呪文の魔法」（八五三頁）であった。なるほどこれが来世から投げかける陰影なのか。

グレーテ・シェーダー（Grete Schaeder）はその論文『ホーフマンスタールの悲劇への道』[6]で書いている。「幽閉された王子に対するホーフマンスタールの最も奥深い関心は、世紀の転換期における自己の精神的危機に由来している。それは自分自身と世界についての深い、秘められた苦悩なのだ」。（三一八頁）　シェーダーはホーフマンスタールの「精神的危機」を説明してつぎのように述べている。「ホーフマンスタール自身が指摘していることは、当時、言語批判が絶望の波のように学問の世界の上に押しいってきたこと、言語によって真実がつかみうるのだという信念がますます失われてきたことである。…ホーフマンスタールにとっては、新しく悲劇を創造するということは一つの芸術様式の克服以上の意味をもっていた。彼にとっては一つのドラマの世界を建築すること、人間の行動の意味する最終的神秘を究明すること、それは形而上学的なものへの突進であり、詩人によって成就されねばならぬ、精神による世界透徹の『行為』であった。それはまた一般的な言語混乱の解決に寄与することであり、彼の予言的な使命を現代において説明することでもあった」。（三一七頁）

シェーダーは「言語によって真実がつかみうるのだという信念」が失われつつあった世紀転換期の時代状況をホーフマンスタールが認めていること、および彼のドラマの世界は「形而上学的なものへの突進」であること、この二点を強調している。すなわち信念の崩壊と形而上学への出発を。

シェーダーの『ホーフマンスタールの悲劇への道』の結論を聞こう。

「ホーフマンスタールの悲劇は明るい未来に対する展望で終わってはいない。詩人が求めた唯一の光源は、『被造物』と神の似姿との間にある人間という存在であった。『ぼくは自分をこれ（十字架像）と切り離すことはとてもできない…』。ホーフマンスタールはゲーテと同様にこのような不安な相反性（ポラリテート）の内部で中道を求めたのだった」。（三四九頁）　もう少し引用しよう。「ホーフマンスタールは希望という表現をこしらえあげることはできなかった――彼が描くことができたのはジーギスムントの姿であった、すなわち、『ぼくが生きていたということを証明してください、誰もぼくを知ることはできなかったにせよ』というこの言葉と同一の人間であった。ホーフマンスタールが『塔』の第一稿で呪文でひき出した精神の神秘全体といえども魔法的な力において、彼の悲劇の、この最後の言葉をしのぐことはできないであろう」。（傍点・船越、三五〇頁）

シェーダーによればホーフマンスタールは『塔』で神と動物との中間存在である人間の中間的苦悩を書いたといえる。そして『塔』第三稿の結末におけるジーギスムントの最後の言葉を魔法的（マーギッシュ）とよんでいる。それは「誰もぼくを知ることができなかった」にもかかわらず、「ぼくが生きていた（イヒ・ヴァ・ダ）ことを証言して」くれという、ひん死の重傷者の切願であったのだが。この言葉を魔法的とするのは、ジーギスムントが、自分について何も知らない者たちから、つまり想像によって自分の存在を証言してくれという要求それ自体が不思議なのであろうか、それともジーギスムントの生涯全体が魔法的なものだったのであろうか（ジーギスムントはこの言葉と合体している人間であった！）。

魔法による混乱はこの程度にとどめておこう。

レイ（W. H. Rey）は『ホーフマンスタールの「塔」における精神の悲劇性と変容』[7]という論文で、『塔』に対する解釈はさまざまあるが、すでに若き詩人の関心であった「自己と世界との関連」および後期ホーフマンスタールがしばしばくり返している「精神と力（マハト）の関係」を追求することが『塔』の詩人像を追求するためには必要だと述べて

いる。レイは『塔』(一九二七年)の世界をつぎのように規定した。それは神の恩恵の外にある世界である。永遠な姿(たとえば「医者」)によって示される世界はここではもはや客観的、効果的ではなくなっている。それは祈りのきき入れられぬ世界であり、神秘的な神との出会いの歓喜はジーギスムントには与えられぬ世界である。歴史を精神的に構成しようとする者は歴史の産物である「暴力」に対して戦わざるをえなくなった世界であるとレイは説明する。このようなおどしの世界の中で精神がいかに自己主張を行うことができるか？　それはホーフマンスタールにおいては、永遠なるものに関与することによってのみ可能であったし、現象界のセットのうらの故郷が彼の精神の主張に保障を与えることができたのだとレイは書いている。無秩序(カオス)と恐怖(テロ)のまん中に純粋な内面性の塔を建てること、そこでは愛と善が成就することができる！　この塔を中心にして沈みゆく世界の内に新しい王国を築く構想をホーフマンスタールは抱いていたとレイは言う。永遠なるものへの関与、つまり「永遠なるもの」へ身を売ること、そして現象界のセットのうらの故郷へ逃げこむこと、内面性の塔、レイは『塔』の中の「形而上学的なもの」を見抜いている。はたして塔はホーフマンスタールの内面の精神によって築かれたのあろうか。つまり塔は彼の精神(むしろ彼の「詩精神」とよぶことにしよう)の「造形物」なのか。それとも塔は端的に言えば現実の反映にすぎないのであろうか。つまりホーフマンスタールが幼い時から経験してきたことを、あるいは感覚でとらえてきたものを『塔』の中に表現しているのであろうか。『塔』は精神の産物か。ホーフマンスタールの「形而上学」に走るか、彼の認識した諸現象の分析、観察、批判に走るか。たしかに二つの道はある。

総決算。ホイシェレは『塔』のように形而上学の領域に達していない文学作品が現代に乏しいのを嘆いた。ヘーデラーは『塔』において理想と現実の深淵は閉じられたと称賛した。クルチウスは『ゲオルゲ、ホーフマンスタール、カルデロン』で言った。「中世とバロックからホーフマンスタールは歴史的な郷土色をひき出したばかりでなく、あの無時間的なヨーロッパの神話をひき出し、これをわれわれの前に見せてくれたのである」。(前掲書一五一頁)　シュレーダーは『塔』で話された言葉は、来世から一段と高い現実を投げかける陰影にかくれ、本質的なものは何一つ語ってはいないぞと首をかしげた。シェーダーは、ホーフマンスタールにとってドラマの世界は形而上学的な精神的「行為」である、と説明した。レイによれば、現象界のうらにある、永遠なものと協定を結ぶことによってのみ、ホーフマンスタールの(詩)精神はその時代の脅威に対して自己主張することができたのだった。

【2】

(1)『塔』についての第一考察

ホーフマンスタールの「塔」にはさしあたりつぎの二つの意味が考えられる。一つは詩人の逃避の場としての塔であり、他は彼を抑圧するものとしての塔である。

第一の逃避の場としての塔とホーフマンスタールをがんじがらめに結びつけるのは正しいだろうか。少なくともホーフマンスタール自身は塔を逃避の場所として公言するのをはばかっていた。一九〇七年の『帰国者の手紙』[8](第二)で彼は書いている。「私にとってはあの小話はいつだって馬鹿げたものでしかなかったのでした。けれどこの時になって、たちまちそれが理解できたのです。それは冷淡さと温かさを織りまぜて、つぎからつぎへとあたかもそれが何でもないかのようにしゃべりまくっている農夫をみた森の住人が身の毛もよだつ思いで

自分の森の中へ逃げ帰ったという話でした。私にもそんな身ぶるいが一度ならずおそってくるのです。けれども私がすみかとすべき私の森はどこにあるのでしょうか」。(二九二頁) この森の住人は農夫の二枚舌に驚いて、森の中へ逃げこんでしまう。しかしホーフマンスタールはこの帰国者と同じように、逃避する場をみい出せなかったので農夫の世界にとどまり、彼と協調して生活せねばならないと悩んでいた。ホーフマンスタールはそこで「農夫」と自分とを言葉を通じて結合しようとしたのだった。「ひとは単語なしで私にものを言わねばならぬ。彼の口調が私にものを言い、彼の立姿、彼の顔色、彼の挙動と活動がそれを語らねばならぬ」。(二九一頁) こうしてホーフマンスタールは言葉(一つの方法)を通じて世界の本質をとらえようとしたのだ。この意味においてホーフマンスタールは「なに(ヴァス)」の詩人ではなくして「いかに(ヴィー)」の詩人だとも考えられる。クルチウスはいみじくも言った。「文学による国民的なものの表現――これはホーフマンスタールにとってはフランスのもつ模範的な意義であった」[9]。(とくにホーフマンスタールのエッセー『フランス語の表現』ではフランス語における単語の組合わせによる表現の彩色についての考察がある。)ホーフマンスタールは歴史の主体の現われとして言葉をとらえ、言葉によって世界と結びつこうと考えている。それ故、彼は例の森の住人に与えられた森と類似した逃避の場所としての「塔」を認めたくはなかったのだ。

ホーフマンスタールの半生涯を貫くカルデロンを素材としたいくつかのドラマ(『人生は夢』、草案『セミラミス』と『二人の神々』、『塔』)における塔はことごとく王子を抑圧する場所としての意味をもっている。ヘルマン・ブロッホ(Hermann Broch)[10]によれば、ホーフマンスタールは父と息子の関係、教師と生徒の関係について長らく沈黙を守っていたが、『塔』において詩人はついにこれらを具象化したという。『塔』は自らの環境に対する反抗の作品であるとブロッホは述べている。

クルチウスは『塔』をブロッホ流に解釈せずに、歴史的・有機的なきずなと神秘な精神の血縁性からしてホーフマンスタールとカルデロンの近づきを強調している。われわれはとりあえず「精神の血縁性」より「反抗の作品」に対して頁を費すことにしよう。またこの作品を「超時間的空間」(マックス・リーヒナー)へ移す必要もさしあたり感じないので、焦点を詩人の人生経験の範囲にまず限るとしよう。

ブロッホの見解は『塔』の悲劇の中核を「受難劇」(クルチウス、「ここでも苦悩は『神の原理』として演繹される」!)のうちにみい出している。ニーニュアスもジーギスムントも共に暴力に抑圧される人物だ。彼らを塔に幽閉する暴力は国家・社会というよりも、父あるいは母に由来しているかのように描写されている。『塔』での王の姿は「父と息子の関係」を父の権力の擬人を通じて明かにした。「一人の王の手は賢者の舌よりも雄弁なのだ」、「これ(指輪)をもっている者は支配者である」、「王冠が聖油をそそがれた頭にふれた。…こうして再びポーランドの王が誕生したのだ」。この王の権力が父の権力としてジーギスムントを塔に閉じこめたのだった。どこからこの父の権力を自分の父は授かったのか、とジーギスムントは苦悩する。

ブロッホは『ホーフマンスタールとその時代』で「父と息子の関係」を自伝的に言及している。ホーフマンスタールの幼年、青年期に対して、父の耽美的な教育影響が決定的な役割をはたしたという。彼の父は一八七三年の株式恐怖のために家の財産をほとんど失ってしまった。こうした損失は息子をエリート的に教育することによって清算されうるのだという一種の義務感を父は抱いていた。詩人ホーフマンスタールはギムナジウムの学校生活で、他の学友たちとは天分や素養においてずっと勝っていることを自分ながら感じていたとも、ブロッホは説明している。詩人の父方の曽祖父イーザック・レーフ(一七六

一～一八四九年）は資本家の身分ながら貴族の称号を受けており、詩人も自分の家が貴族であることを意識していた。こうした背景からブロッホはホーフマンスタールの自己陶酔傾向と彼の王たる自負とを指摘している。「少年ホーフマンスタールは…まさしく童話の中の王子であり、美貌と才能と勝利者の威厳により他からぬきんでていた。また他から自分が区別されていることにより、また、一『貴族』としての皇帝意識そのものによりぬきんでていたといえる」。（一一八頁）

ブロッホの注釈、「少年ホーフマンスタールにしてみれば、他の少年たちにとってはただの空想の童話にすぎぬものから現実の童話が生まれたといっていい。…皇帝の姿は以後ホーフマンスタールの空想世界から決して去ることはなかった。皇帝の姿は夢の中の夢、童話の中の童話として、夢と童話の化身として、いつまでも残っていた。なぜならおそらく皇帝像によってこの少年は（すでに）詩の本質を会得したのであろうから」。（一一八頁）　つまりブロッホはホーフマンスタールの詩精神の特徴は幼年期に詩人の頭脳に反映した「皇帝の姿」の残像の中にみい出されると説明した。ホーフマンスタールが半生涯の間ジーギスムント悲劇を追求してやまなかった一つの理由は、詩人が自らの体内に宿る王の意識に対する共感と反感の葛藤を体験し、苦しんでいたことにあるのではないかと筆者にも一応もっともに思われる。

ホーフマンスタールにおける「教師と生徒の関係」についてつぎに述べよう。ブロッホは若きホーフマンスタールを教育した当時のギムナジウムの教師は学問的には専門家といえたが、心理学的に訓練された教育者ではなかったと言っている。若い詩人にとっては彼を囲む仲間も教師の役目をはたしたのではなかったか。詩人がいかに彼の友人との関係を受けとめていたかを示す手紙を二通、下に抜すいしよう。

「早熟でしたが非常に無経験のまま私は、自分の青年時代に陥っていた絶対の孤独から外へ踏み出したのでした。そんな状況でしたので、あなたは私にとっては一人の人間、一人の友人であったばかりでなく、世界との新しい結びつきでもあったのです」（シュニッツラー宛）。「もっと君という人間がわかってくるならば、それは詩人としての私にとっても決定的な意義をもつことでしょう。私は他人によって完成されざるを得ない人間のようです。君が私に注意を注いでくださるかぎりは、君は私の最も強い友人なのです」（シュレーダー宛）。

ホーフマンスタールはこうした「教師」から強烈な影響を受け、それに圧倒されそうになる自分を何とか守りたいとけんめいであったにちがいない。彼はジーギスムントの内面は決して他人によって触れられるものではないという信仰を「教師と生徒の関係」において示そうとしているのだ。ユリアーンは世界から隔離されたジーギスムントにとって、「慰めの言葉をこうしたものさびしい人生」に与えてくれた者以上の人間ではなく、彼の魂を支配できる師ではなかった。つぎにジーギスムントがいかに師から魂を守ったかを示そう。

ユリアーン：おまえの精神に私は養分を与えていたのだ。私はおまえの中にその精神をこしらえてやったのだからな。おまえを使っておまえの本体を造ったのだ、私の奥深く秘めた思想をおまえの体内に注ぎこんだのだ！

ジーギスムント：だがいまぼくは、あなたによって造られはしたが、造ったあなたのはるかかなたの所にいるのです。ぼくがひとりぼっちで横になっているとき、ぼくの精神はあなたの精神が届かない所へ行っている。(11)

「精神が届かない」かなただって！　それはジーギスムント特有の護身符ではなかろうか。そして「精神をこしらえる」という表現のややこしさ。　この問題はつぎの節で立ち入ろう。　まずはこの節のまとめ。ホーフマンスタールのジーギスムント悲劇は詩人の「精神の自己

主張の証拠(ドクメント)」(レイ)であった。

(2)『塔』における第二考察

この節の課題はこの小論の【1】で紹介したいくぶん「形而上学的」な「ジーギスムントの運命における無時間的な象徴的意義」(シェーダー、三三九頁)をもつ悲劇『塔』での作者ホーフマンスタールの告白に耳をかたむけることである。われわれは静かに彼の告白を聞いて、少し考えてみなければならない。それは目新しい言葉が出てきたとき、それに対してほんの少しわれわれの頭を働かす以上の仕事ではない。

前節の終りの疑問、すなわち塔の中の教師と生徒の問答のむずかしさはつぎの点にある。それは精神、思惟、超感的な「真理の源泉」の存在を認めることはわれわれにとって非常にむずかしいということである。いったい精神、思惟、意識一般はそれ自体、独立し、成長し形成されていくのであろうか。先に引用した二人の対話の周辺を再録しよう。

ユリアーン:おまえの魂は向上するためには悩まねばならぬ――その他のことはすべてむなしい。

ジーギスムント:それをあなたはぼくに教えてくれた。精神と精神の話以外はすべてむなしい。…

ジーギスムント:ぼくは力強い人間だから、星と一体なのだ。だからそれらの星はこのことを知っていて、ぼくの行動を待っているのだとあなたはぼくに教えてくれた。ぼくの胸の内からぼくは星に向かって世界を生む…。あなたは語ったではないか、先生、最も奥深くにある世界の本性を享受しつつ、自分の内部から世界を創造する夢想の中にある人間の胸は選ばれた星たちにも似ていると。暗やみの中におってこのことを知る者がそれ以上何を必要としよう。あなたはぼくに話してくれた、この地上はおまえには何もつけ加えてくれはしないのだと。(D. N. S. 138 f.)

そう言ってジーギスムントは胸をたたく。「ぼくは永久にこの堅固な塔の主人であり、王なのだ!」なるほどこうしたジーギスムントの精神の領域にはユリアーンの精神は届いていないのだ。たしかにユリアーンはジーギスムントに妄想の類を吹きこみ、後者はそれを信じた。これが「精神をこしらえる」意味だった。

つぎに『塔』を支配する不可知論を学ぼう。王の政治顧問役を退いて修道院に入ったイグナーチウスは、真実は決して知ることができないとまわりくどく吹聴する。素朴な王に対する不可知論者イグナーチウスの弁を聞くことにする。

王:このバジリスクめ! きさまから真理をもぎとることができたらな。おまえはいつも私のまえでは最後のものをかくしてきたのだ、ちょうどいじ悪い継母があわれなみなし児のまえでやるように。

老施物分配吏(以下イグナーチウスと記す):真理はすべての仮象の背後にあり、神のもとにすみかをみいだしている。(同七一頁)…

王:かつてどこにも存在しなかったものをとらえる鏡はいったいどこにあるというのだ。

イグナーチウス:…この世には一つの目があって、そのまえでは今日と昨日は同じであり、明日と今日もまた同じなのだ。(同七二頁)…

イグナーチウス:おまえはさけぶ、がおまえのうしろにあるものがおまえを制し、おまえのさけびを聞くように命じる…耳のうしろの耳、鼻のうしろの鼻。…おまえからは決して去って行かぬもの、それはお前をちゃんと見抜き、おまえを罰しようと欲し

ているのだ。これが神であるぞ！（同七五頁）

イグナーチウスが神と称する時間を超越した一つの目、耳のうしろの耳、これらは何ら永遠の神秘ではなく、不可知論者イグナーチウスの身分のあかしにすぎない。

ジーギスムントも卒直に自分は不可知論者であると告白している。塔の暗やみの中で「真理」という迷路に明らかにまよいこんでいる。つぎに若干の例証をする。

（1）「光はよくきくのです。身体に入り、血液を浄化する。星はそうした光なのです。ぼくの体の中には一つの星があります。ぼくの魂は神聖なのです」。（同二七頁、傍点・船越。ジーギスムントは心の中に神聖な星と魂を偽造している！）

（2）「ぼくは証言します。この男（ユリアーン）はぼくに真理を教えてくれたのです。それによってのみぼくの魂が生命を保っている真理を。なぜなら炎と同じようにぼくの魂は真理を必要とします。空気が閉ざされると炎は消える。（同一五四頁、魂＝炎、真理＝空気というわけ。巧みな詭弁の序幕だ！）

（3）「われわれは事物についてそれがどんな状態にあるか知ることはできない。どんなものについても、それがわれわれの夢以外の本性ではないと言えるものは何一つない。ぼくがこの真理によりおまえやそこにいるあなた方とは別人間になっていると考えるのは、もちろん錯覚というもの。ぼくはあなた方と同じ人間だ。がぼくは真理を知っている。あなた方は何も知っていない」。（同一五四頁、なるほどすべてが夢のような本性ならば何一つ知るよしもない。コイナー氏は次のように話した。ソクラテスはおうへいにも「私は何も知らないということを知っている」と吹聴した。「というのは私は何も勉強していないから」と、この哲人がつけ加えるにちがいないとその場に居合わせた人々は待っていた。しかしソクラテスはそれ以上何も言えなかったらしい。なぜなら最初の文句を彼が言ったとたん拍手がわき、それが二千年間止むことがなかったのだから。コイナー氏は正直に観察している。「何も知らないということを知っている」、この金言が二千年以上も拍手をあびてきたとは。）

（4）「彼らはぼくに言った。おまえは夢をみていたのだ、くり返しくり返し言った、おまえはやはり夢をみていたのだと。それによってまるで誰かが鉄の指を戸のちょうつがいの下に差し入れたかのように、ぼくのまえで戸がちょうつがいからはずされた。それでぼくは壁のうらへ入ることができた。そこでぼくはあなた方が話していることを全部聞くことができる、があなた方はぼくのいる所へはこれない。ぼくはあなた方の手からのがれているのだ」。（同一五六頁、ジーギスムントは、自分は夢の世界に入っていきましたと自白した。その夢の世界へは自分だけしか入れないのだと思わず「真理」をもらしてしまった。ジーギスムントはユリアーンに対しても壁のうらからささやいた。「あなたはぼくのところへ来る通路をもっているのですか。ぼくには誰も近よれない、ちょうど数千の親衛隊に守られているように」。（同一四二頁）（3）における不可知論者は夢の世界は存在するということを知っている「非不可知論者」に転向した）。

（5）つぎはいかにジーギスムントが自分の清浄な魂を安売りするかの告白。

「あなたは父が屠殺した豚をまだ覚えていますか……それから豚は十字形の木につるされましたね。…その内部は何とも言えぬくろっこいものでした。ぼくはその中に入りこんでしまった。これが豚からあの最後の恐ろしいさけびの瞬間に去って行った魂だったのでしょうか。その代わりにぼくの魂が豚の中に入っていったのでしょうか」。（同八七頁、ジーギスムントの悩める心は魂の交換所であっ

た。）

「ぼくは自分をこれ（十字架像）と切り離すことはとてもできない、が斜めの木につるし上げられ、内臓を出され、内部は血でまっ黒に染まったあの豚とも切り離すことはできないのです。おかあさん、ぼくの最後はどこにあり、あの動物の最後はどこにあるのでしょうか」。（同八八頁、ジーギスムントはキリストと動物の間で動揺しはじめた。彼の魂はこの両者のどちらへも売り渡されることができたのだ。「感情移入」できる人間の魂。）

以上、星が体内に存在するという自負にしろ、「魂＝炎、真理＝空気」という公式にしろ、事物は夢以外の本性をもたぬという「真理」にしろ、現実界のうらの安全な場所にしろ、キリストと豚との間を悩む魂にしろ、いずれも人間の精神は何ら確実な事物をつかめないという不可知論への屈服にすぎない。なぜジーギスムントは夢の世界の住人になったのだろうか。彼のまえには新しい夢の（彼の心像に浮かぶ）世界を現実に「設立しようとする意欲」ないし妄想が余りにも貴い価値をもって現われていたのだった。ただそれだけ。「ぼくは心の中に設立（ゲブリュンデン）する意欲を抱いている…ぼくは一つ一つあれやこれやと改めたくはない、一度に全部を改めるのだ、そうしてわれわれすべては新しい国の市民となるであろう」。（同一九七頁）　世界の全面的改造だと？　ジーギスムントの世界なる概念は何であったろうか。これは考察に値する！。

「どこへぼくを閉じこめたのです。ぼくはいま世界の中にいるのですか。どこに世界はあるのです？」。（同二五頁）　「人間は近くにあるものを認識するのはむずかしい。…この内部に〔彼は自分の胸の上に両腕を組合わせる〕世界の四つの端がある。鷲よりも早くぼくは一つの端から他の端へと飛んで行くのです」。（同九八頁）　「ぼくの言うことを理解してくれ。一人の人間が真理の中で暮らすには少くとも世界全体よりも広い空間を必要とするのだ。だがぼくは二〇年間あの洞窟の中に住んでいた。それで一つの言葉を知ることができなかった、あこがれという一語をね。というのもぼくは自分の住んでいた狭い場所に入りこみ、そこにおり、そこで主人ぶっていたのだ」。（同二〇〇頁）

まずジーギスムントは世界という概念の定義を求めた〔「どこに世界はあるのです」〕。つぎに彼は世界は自分の胸の中に存在すると言った（世界を映す鏡があると言ったのでもなかった）。最後に彼は「世界全体よりも広い空間」は自分の胸の中にはなかったとくやしがった。このように『塔』における世界の概念は悩ましい「神秘」の衣をまとっている。

不可知論の節における総決算。不可知論とは何か。「カントは『物自体』の存在をみとめるが、しかしそれは『不可認識的なもの』、現象から原理的に区別されたもの、原理的に別の領域、知識には到達できないで信仰にたいして啓示される『彼岸』の領域に属するもの、と言明している」。「不可知論の路線の本質はなにか？　感覚よりさきにすすまないこと、感覚の限界外にはいかなる『確実なもの』をも見ることを断念して、現象の此岸に立ちどまることである。…不可知論者は、物自体にかんする思惟そのものをゆるさず、われわれはこれに確実なことをなにも知ることができない、と言明する」。最後にもう一つ。「不可知論者は言う、私は、われわれの感覚によって反映され模写される客観的実在があるかどうか知らない、私は、これを知ることは不可能であると宣言する（…）と。ここから、不可知論者による客観的真理の否定と、天狗、荒神、カトリックの聖者、およびこれに類する物にかんする学説にたいする寛容、町人的な、俗物的な、卑怯な寛容とが出てくる」。

【3】

『塔』第一稿でジーギスムントは自分の死を自覚しながらこうさけんだ、「ああ、ぼくはどこにいたんだろう。またもや塔にいたというのか？…塔を投げこわしてしまえ！鎖を砕いてしまえ！」（D.4. 二〇二頁）　ジーギスムントは塔から外へ出る希望をまだ抱いていた。が『塔』最終稿では塔の外へ出られるという望みは消えている。第三稿は平和の国の約束が現代における暴力の恐怖によって破壊されるのをみるメシアの悲劇であり、行動の断念とメシア的希望の困難さによりジーギスムントは自分の世界を失った（レイ）。第一稿と第三稿の大きな相違はここにある。『塔』第一稿ではジーギスムントの後継者である「子供の王（キンダーケーニヒ）」によって建設されるべき平和の国の約束がドラマの理念であったが、最終稿においては、それはジーギスムント（＝「権力を持たぬ殉教者」、「聖者」）とオリヴィエー（＝「むき出しの暴力の権化」レイ）の対決であった。レイはこの改作の一原因をホーフマンスタールのつぎのような二者択一の危機の中にみた、つまり真正（エヒテ）な文化の再編成か、それとも暴力支配の野蛮に屈するか。第一稿から第三稿に到った経過をレイは説明して言う、――ホーフマンスタールは現実が精神に反抗し始めるさまをみせつけられ、精神的に動揺した。彼は第一に初稿における現実性の欠如を悟った（ジーギスムントは塔の夢の世界から現実の世界へ完全には踏み出ていない。現実の化身であるオリヴィエーが幽霊界、冥府の現象にすりかえられている、すなわち現実の政治問題が魔法の領域に移されてしまい、魔法使いジーギスムントによって解決されてしまっている）。第二に征服民族（の代表者）に対する対決をジーギスムントは避けている。すなわちジーギスムントの倫理的基礎による政治・社会的な新秩序が特権階級（＝代表者）の反抗に耐えうるかという問題の回避である。また子供の王の登場によりジーギスムントの仕事の歴史的検証が問題とはなっていない。しかしながらホーフマンスタールのけい眼は現実の歴史過程についての「理想主義」的な慰めで自分をごまかすことができなかった。それで「時代の深淵」は魔術で克服されえず、魔術なしの現実の光にあてて解釈されねばならぬという予感が詩人を改作に向かわせた。レイは以上のように説明している。

シェーダーは一九二七年の『塔』についてつぎのように述べた。「ジーギスムントはここでは殉教者の姿で死んでいる。けれども彼は信仰も希望もない殉教者であり、殉教者の本質である愛の精神を、人間の品位をけがすものに対する苦難にみちた防御の形でやっと実現したのだった。ここで詩人は終局的なきびしい真理のためにあらゆる慰めを断念したのだった。…詩人は『塔』から、慰めや予言となっていたものすべてを削除した。そして暗黒（の時代）のさまざまな力に対してほんのひとつだけを対置した、ジーギスムントという人間を」。（三四八頁）

レイは『塔』第一稿の短所を新しい時代に対するジーギスムントの魔術的処置にみた。シェーダーは第一稿の慰めと予言は第三稿では消えたと言った。

第一稿と第三稿の相違はドラマの筋書きからすれば、だいたい以上のようである。しかし、こうした問題は『塔』に対するわれわれの批判の決戦場ではない。それ故、この小論では塔の住人である幽閉された王子が塔の外へ出たいと願っていた姿勢に今後焦点をしぼることにしよう。これは両稿に共通した姿勢であった。

アレヴィン（R. Alewyn）はつぎのように言っている。「王子は…一段と高い世界の出であるが、高位の世界と下位の世界の間に宥和と救済の橋をつくるために低い世界へ下りて行った。この最終的な神秘の中でホーフマンスタールは人生が彼に何を教えたかを言い表わそう

としたのだ。…この道は名声から秘めごとへ、神話から人間性へ――実に、**神殿から街頭へ**と通じていったのだ」[12]。高い世界から低い世界へ、神秘から人間性へ！　アレヴィンはこれがホーフマンスタールの変遷の意味だと言った。

パウル・レクヴァルト（Paul Requardt）[13]は『塔』の言語的考察によりジーギスムントの「神殿から街頭へ」（アレヴィン）の過程を説明した。『塔』における言葉は「言語の否認と言語への愛、世界の否認と世界の所有の弁証法」である。塔は「人間性の品位を奪う土牢」であり、同時に世界の中核、世界と自我の深淵、根源なのだ。レクヴァルトは王子を「彼の言語形成およびそれによる人間形成の段階」としてとらえ、それを「世界獲得の段階」とみなしている。ただし彼はつぎのようにつけ加えた、「ジーギスムントは世界へ入っていったとき、彼は塔の存在の根源を保持しようと欲した。しかしこれが可能であるには、彼が直面する世界がその本質において塔の中での世界すなわち自我としてのジーギスムント自身と同一でなければならなかった、つまり世界は象徴的でなくてはならなかった」。ジーギスムントは象徴の世界の破壊を経験したので（バジーリウスとの対面）再び塔を出るのがこわかったのだ（レクヴァルト）。塔での王子の言葉は「小児語」であったが、ウィーン人召使いアントーンは彼のウィーン方言により、「ジーギスムントの世界への橋」となった。こうしてレクヴァルトはアントーン先生によるジーギスムントの言語的成長（！）は彼の人間世界への接近を示すものだと主張している。言葉をつつけ！　言語的象徴の重み（象徴世界）が「塔の存在の根源」だったという。つまり現実には象徴の世界（塔）は人間の世界では通用しないというのだ。言語学者にとってははじめに言葉ありき、世界や人間は二のつぎだ。

アレヴィン、レクヴァルトとも塔と人間世界を結ぶ橋を問題としている。高い世界から低い世界への、象徴の世界から象徴の許されぬ世界へのかけ橋を。

ホーフマンスタールはなぜ彼らをそのような見解に導くことができたのだろうか。少し頭をひねれば気づくことであろう。それはホーフマンスタールの「二元論」的思考法（「哲学上の一元論と二元論は、唯物論または観念論を、徹底的に遂行するか、あるいは不徹底に遂行することに存する」！）と「二元論」克服のためにあみだした融合思想なのである。これらの精神的枠の内部でホーフマンスタールは「世界」ととっくみあいしている。それは長い苦難の道だった。それ故、「ホーフマンスタールの変遷の意味」、高い世界から低い世界への冒険、塔の世界から出ようとするあの姿勢を多少とも考察しようとする者は、まず詩人の融合思想の折衷の味を吟味する必要がある。

ホーフマンスタールの二元論の意味について。『アンドレーアス』の覚え書の中で彼は二元論について真剣に考えている。「アンドレーアスの道：第一に愛する心を持つこと。第二に、精神と肉体が一つであることをまなぶこと。彼はいつも Dualismus（二元論）に苦しんでいる。あるときは彼自身の精神が、あるときは彼自身の肉体が、彼には無価値だと思われる。彼はまなびはじめる。肉体の背後に精神を感じること。（またその逆を。）肉体が精神の担い手であることを。（またその逆を。）[14]」〔大山定一訳〕　アンドレーアスは精神と肉体という両者の存在を信じ、二元論に頭を混乱させている。ホーフマンスタールは精神の存在（マリア＝「思想、不安、吐息から成る精霊」）と肉体の存在（マリキタ＝彼女には肉体の一つ一つの部分、しぐさなどが不滅のものであり、彼女は魂の存在を信じない）をこしらえ、アンドレーアスのまえに置こうとした。当然ながらアンドレアースは「ふるえる磁石の針」のように両者の間で迷った。『アンドレアース』メモにおける二元論的要素は精神と肉体の分離であった、それも融合

のために！　分離は合一に不可欠であると詩人は正当にも言った。ホーフマンスタールはもともと一つしかないものを分離して、精神的魔法の仲人で融合するんだ、とも言った。

結論を言おう。ホーフマンスタールは『アンドレーアス』において、精神と肉体を分離してこのウィーン青年貴族を苦悩に陥し入れた。がこの分離の矛盾に気がつき（「精神と肉体は一つのもの」）両者を合体しようとした。この再婚は座折した。彼は精神の世界へ足を踏み入れすぎたのだった。

話を『塔』の世界にもどす。ここでは精神と肉体の葛藤の波はどうやらおさまっている。その代わり高い精神と低い精神（これはもはや二元論ではない！）が互に相手をつつき始めた。王子ジーギスムントは高い精神の持主であった。低い精神はオリヴィエーに代表される反乱の群であった。

ジーギスムントの別名（彼の人間的苦悩は未解決のままにしておいて）。「王者にふさわしい人」、「最高の王の長子」、「神聖で触れてならぬ」人間の子などなど。この塔の王子はおもむろに外に出ようと宣言していう、「宮殿の屋根の上の風見のように、ぼくはしらけゆく夜明けの時刻と、きらめく星がその見張りの位置から離れる時刻とを予感する」。（D. Ⅳ. 一六九頁）　ジーギスムントは塔の外へ出てさけぶ、「いまは偉大な王が堂々とあい対する時代なのだ……私はあなた方小国の民を大きな混ぜ桶で新しく融合しよう」。（同一九八頁）　これが気高い王の本質だった。これではひどすぎるから、王子に仮面をかぶせる必要があった。そしてジーギスムントは「過渡期の王（ツヴイッシェンケーニヒ）」として「子供の王」にバトンを渡して息をひきとった。後者は仮面の奥から荘厳に説得する。「おまえたち、静かにするがいい。おまえたちはこの男を時間の内ではかることはできない、星座のように時間の外ではかるのだ」。（同二〇八頁）　ここでホーフマンスタールが子供と名づけるものはまさに現時間の外にあった。それは現在からの絶好の逃避場所であった。（『アンドレーアス』のケルンテルの章を参照、「ここにないものはすべてがよいように思われた。現在の外にあるものはすべてが生きる価値がある」。E. 一五五頁）子供の王はジーギスムントを悪夢の清算として無時間の中へ葬り去ったのだ。子供の王はたしかにユートピア的存在で、それはホーフマンスタールの観念の世界、夢の世界の産物だった。がともかく子供の王は戦争孤児たちの首領という「低い世界」の王であった。ホーフマンスタールは、高い世界も低い世界もそこにある人間性は同一なのだから本質的区別はないと一九〇七年に書いている。

「われわれは最高の世界から最低の世界へと動いていくのである。カリフから理髪師へ、貧しい漁夫から豪奢な商人へというふうに。その際、われわれをとりまき、われわれをはば広い、軽やかな波でもちあげ、運んでくれるのは同じ人間性なのである。われわれは妖精や魔法使いや、悪魔の間にいるのであるが、やはりわが家にいるように感じているのである」。（P. Ⅱ.『千一夜物語』）

この人間性という接着剤を使った二つの世界の折衷的な融合精神をみよ！　良きにつけ悪しきにつけホーフマンスタールの二元論の本質はこうした融合精神と兄弟ではあるまいか。こうすれば「言葉のうえでの対立が絶滅されることはうたがいない」。

【3】の総決算。「『塔』。われわれの現実の本質的無情さを描くこと。この現実の中へ魂がおぼろげな、神秘的な領域から陥っているのだ」。[15] 塔の中の「おぼろげな、神秘的な領域」からながめた現実は無情だったと幽閉された王子は認識したのだ。それは「精神、理性、意識、等々を第一次的なものとる」人たちの二千年以上も続いた、怒りであり、混乱であり、当惑とはじらいでもあった。

あとがき

ホーフマンスタールの「世界」に入るには、やはり小説『影のない女』は重要な作品であろう。妖精の国に生まれた后は人間のしるしである影がどうしても欲しかったという。読者はそこで『千一夜物語』と『バルザック』というエッセーを書いた詩人に出会うだろう。さらに『塔』にみられる世界観は、もちろん中世劇『誰でも』、カルデロンの宗教劇に拠る『ザルツブルクの大世界劇場』などにみられる来世での個人の救済、アンドレーアスの「孤独」と「融合」の体験などとからみ合って生じていることは否定できぬであろう。これらの世界と新しい「無秩序と恐怖」の世界との衝突はレイも指摘しているところである。本小論においてはこの衝突の意味する「悲劇」の大きさについての考察はさしひかえられている。それはホーフマンスタールの諸作品のとり扱いいかんでは、必ず帰納される問題であろう。

註

(1) Otto Heuschele : Hugo von Hofmannsthal (Bildnis des Dichters), Mühlacker 1965

(2) Otto Heuschele : Der Turm in „Hugo von Hofmannsthal", Freiburg 1949

(3) Edgar Hederer : Der Turm in „Hugo von Hofmannsthal", Frankfurt am Main 1960

(4) E. R. Curtius : George, Hofmannsthal und Calderon in „Kritische Essays zur europäischen Literatur", Bern 1954, 2. Auflage.

(5) R. A. Schröder : Der Turm – 1926 in „Die Aufsätze und Reden, 1. Band", Gesammelte Werke in Fünf Bänden, 2. Bd., Berlin und Frankfurt a. M. 1952

(6) Grete Schaeder : Hugo von Hofmannsthals Weg zur Tragödie, Deutsche Vierteljahrsschrift 23. Jahrg. 1949

(7) William H. Rey : Tragik und Verklärung des Geistes in Hofmannsthals „Der Turm", Euphorion 47. 1953

(8) Hofmannsthal : Prosa (以下 P.) II. 1959

(9) Curtius : Zu Hofmannsthals Gedächtnis, 前掲書 S. 125

(10) Hermann Broch : Hofmannsthal und seine Zeit. Eine Studie. in „Essays·Band I", Gesammelte Werke, Zürich, 1955

(11) Hofmannsthal : Dramen IV. (以下 D. IV.) 1958, S. 138 f.

(12) R. Alewyn : Über Hugo von Hofmannsthal, Göttingen 1958, S. 160 f.

(13) Paul Requardt : Sprachverleugnung und Mantelsymbolik im Werke Hofmannsthals (DVjschrift 29. 1955) の IV.

(14) Hofmannsthal : Erzählungen, (以下 E.) 1953, S. 226 f.

(15) Hofmannsthal : Aufzeichnungen, 1959, S. 242